

『半分病気 ～心を病んだある都立高校教師の告白～』 **本**

あきもとのぼる 著
(文芸社 ¥1,700)

ここ数年、同年代(50歳代)の知人から「職場に行けなくなった」「電車に乗るのが怖い」「人と話すと動悸がする」「家族と離れた」という話を聞くことが増えています。この本の著者も学生の頃の夢であった都立高校教師になったものの、荒れた学校の問題(暴力・窃盗・喫煙・バイク・麻薬・放火等々)に振り回され、管理職からは反権力・反体制社会科教員という露骨な排除を受けていました。しかしながら先輩教師から学んだ「教育は自由によって成立する人間的な営みを実現する活動(「生徒の視点からみる教育の立場」「権力からの独立」)を基本として実践。そうした「自由」への期待の表裏一体にある転任する度のさらなる生徒の学力不足、無気力さと耐性を欠いた暴力事件の連続に精神的、体力的に負荷が多くなり、身体中に異常が出たという現実。そして同時期に離婚によって家庭環境も急変して子育てとの両立の難しさに直面し、気がつけば、パニック障害、うつ病、離人症、社会不安障害の病名がつくことに。病気休暇中は給与の8割を受給していたもののそれさえも心的負担を大きくし病状が悪化したようです。精神的なストレスを理解しない人からすると「弱い人間だ」「休んでも給与を8割も受け取れるなんて幸せだ」と感じる人もいるかもしれません。最近では「モンスターペアレント」と言われる教師に対する保護者の理不尽な要求や苦情が社会問題となっています。こうした中で悪戦苦闘する教師の心の病での「葛藤」はなかなか理解が難しいかもしれません。時として理不尽なものを受け止めることの多い現代においては、本の帯に書かれた「真面目な人が危ない!」という短い言葉の中に誰でも起こりうることを危惧しながら読んでみてほしい本です。(小出昇一)

あとがき 県立の普通高校に知的に障害のある生徒が試験に合格してこの春から入学するという記事が新聞に掲載されていました▼今号の本の紹介「半分病気」にも書いたように、学習意欲の無い生徒が多く在籍する一部の公立高校では授業そのものの成立が困難だという嘆きを現場教師から聞きます。授業中に携帯で大声で話し、足を机に乗せマンガ雑誌を読み、授業中に平気で早退する…。教師の指導力不足という以前に「学ぶ気持ち」の欠如に対し指導するすべも無いような状態だとの話でした▼その中で、学力の習得に少し時間

『子どもの精神科』

山登 敬之 著
(筑摩書房 ¥1,500)

著者の山登敬之(やまと・ひろゆき)さんは冒頭で、「大人の内科に対して小児科があるように精神科にも“児童精神科”という専門分野がある」と書いています。本誌の読者は当然のことのように感じられるかもしれませんが、そうでない方もたくさんいらっしゃると思います。

目の前の子どもが、どういう状態だったら精神科の門を叩いたほうが良いのか、そこでは子ども(家族)や保育者・教員等のために何をしてくれるのか、それは小児科や神経内科で診てもらうのでは足りないのか。

本書は、第1部幼児・学童期編では自閉症・ADHD・チック・吃音と選択性緘黙・子どもの不安障害、第2部思春期編では不登校とひきこもり・統合失調症・思春期の気分障害・思春期の不安障害・摂食障害について、筑摩書房のウェブサイトに掲載されたものに加筆して1冊の本にまとめたものです。

オーソドックスな診断と治療の話あり、思いのこもった体験談あり、病気の変遷史あり、分析的な解釈あり、脳の働きや薬の効能ありと、とても充実した内容です。興味のあるところを辞書的に抜き読みするもよし、1冊を通して読めば児童精神科とはどんなものかが、けっして教科書的な記述でなく、むしろ話し言葉に近いような消化の良さで頭に入ってきます。特に、自閉症の項で展開される「療育の基本は遊びと生活指導です」「子どもを“訓練”しようと思わないで」などの山登さんの療育論は多くの方に耳を傾けていただきたい気がしました。(菅野正裕)

のかかることがあっても、学ぶことや知ることに興味を持ち、欠席、遅刻、早退などが無い、口頭の学習態度の良い生徒の受け入れは、障害がある、ないという枠を越えて本来の学校教育のあり方を問いかけるきっかけになる側面があるようです。今は少数であるこうした生徒の合格が、今後の「学ぶ場」としての当たり前のことを実現される結果を望みたい気持ちになります。「かざぐるま」では色々な立場の方からこうした「共に学び生きる」教育の取り組みを紹介していきたいと思います。(小出昇一)

福祉の主体者——それは障害をもつあなたです!

かざぐるま

184 2008.4
目次

風…音楽は風のように(福田文平)……………2
 障害児放課後・余暇支援事業(鎌倉市障害者福祉課療育相談担当)……………3
 多摩区保健所の保健師さんとともに来た道(石堂志津子)……………4
 みんなの未来は、みんなのでひらく……………6
 いのちの森づくり〜進和学園から世界へ(進話学園どんぐり委員会)……………8
 こんにちは!ブロッケンです(高橋隆昭・外川裕美)……………10
 わが子の巣立ちを見守って(44)……………12
 提灯職人になりました(伊藤佐代子)……………12
 本…『半分病気』『子どもの精神科』……………12



発行：神奈川県保健福祉部
 編集：小児療育相談センター
 広報委員会
 身近なニュース、活動報告、その他ご意見感想、素朴な疑問などをお寄せください。
 〈宛先〉〒221-0822 横浜市神奈川区西神奈川1-9-1
 小児療育相談センター 広報委員会 TEL:045-321-1721 FAX:045-321-3037
 Eメール: shoniryoku@shinseikai-y.jp

風

音楽は風のように

福田 文平
(アカバラサークル S.C.S)

音楽というのは不思議なもので、時に言葉や境遇を超えて想像の裏側の方へ語りかける。まるで草原を駆け抜ける風のように、心地よく穏やかな流れのままに、一つの世界を広がってゆく。

これはきっと私だけが見た光景ではないだろう。あの日そのホールを流れた風は、確実に、そしてすべての人の大地に流れていたはずだ。

私はそのステージの上にいる。父親が職員や利用者の方々と共に作ったバンドが、ほのほの音楽祭で演奏するというので、助っ人コーラス隊として参加していた。

初めは正直乗り気ではなかった。いつからか自分を縛り付けていた小さな羞恥心や四角いプライドみたいな感情が邪魔をしていた。しかしそんな感情はバンドの奏でるリズムとそれを待っているキラキラした瞳の群れが、どこかで浄化してくれていた。普段音楽に直に触れることができない人たち、それをいつも支える人たち、それぞれの事情があることを知った。この音楽祭の持つ意味の大きさに気付いた時、父親の背中がとても大きなモノに感じていた。

そのステージで音の一部となり、父親がバンドを続けていく意味が少しだけ解った気がした。本当に、何の混じり気もない無邪気な笑顔、音楽の中に、まるで元からそこにいたかのように溶け込む姿を、私はハッキリと感ずることができた。

音楽は風のように流れていく。それはそこに居るすべての人たちを一つに包む不思議な魔法なのだと思う。

表紙のことは：山下公園の春（横浜市中区）

大正12年の大震災の瓦礫で海を埋め立てた山下公園が今や横浜を代表する臨海公園である。

<撮影>：岩瀬 昭二



ちようちんの絵柄の印刷

角形のハンバーグ、三角錐、四角柱のコロケなど、次々と私が思いつきもしないものを作って見せてくれました。

創造力、発想はとても豊かでした。親ばかりと言って片付ければ終わりですが、私は自分にはない才能を持っている彼がとてもまぶしく感じました。「淳司はすごい〜！」と早い時期に認めることができたのは幸運でした。

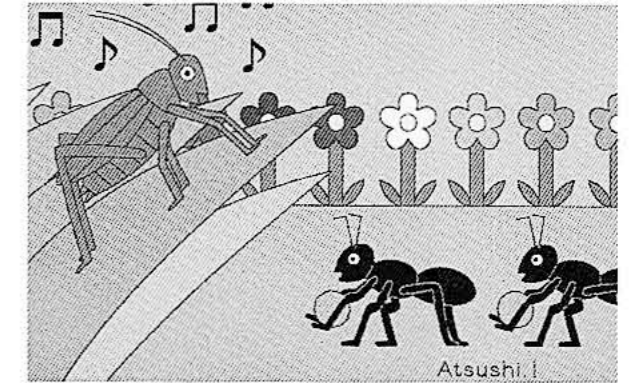
後々までこの感情が私を支えてきてくれたのかもしれませんが。ひとつ認めることがあるだけで頑張りました。

4. 絵とともに

ことは小学校1年生で2語文程度でしたが、絵を描くことで自己表現ができたためか、パニックは子供の頃はありませんでした。描いた絵を見ることによって、ほんの少しだけ彼のことが理解できました。しかし、今思い出すとコマースの入った絵ばかり描いていたような気がします。

小さい頃、毎日寝る前に絵本を見たり、本を読んだりしていました。多動な子どもがジーとしている時は、寝る前ぐらいしかなかったからです。絵本の「こどものとも」は大好きで、内容を暗記していたくらいです。この絵本が今の絵を描く淳司を育ててくれたのではないかと、ある画家の方が言われました。絵本が淳司の絵の先生だったようです。今も本屋さんに行ったらいろいろな絵本を買ってきているので、淳司の部屋の本棚にはたくさんの絵本が所狭しと並んでいます。

養護学校高等部を卒業後も、「絵を描く」という創作活動は続いています。あることがきっかけで



「アリとキリギリス」

何年間もこだわり続けていた「十二支」を題材としたカレンダーを制作、販売することができました。

その後、職場の上司が私的にパソコンを指導してくださったことにより、パソコンで絵を描く技術を習得しました。手で紙に描きたい物の輪郭を描き、それをスキャナーで読み込み、その後はパソコンソフトを使い、描いていくという方法をとっています。そんなことができるようになったため創作、発表する意欲が出てきて、活動の範囲がグーンと広がりました。現在は個展を定期的に開くようになりました。ほのほのとした絵が多く「癒される」とファンが多くなってきています。

(<http://atsushi12.fc2web.com> 参照)

5. 職業人になれたのは？

息子が幼稚園に通っている頃、将来一般就労できるなんて思いもしませんでした。彼がどうして就職できたのでしょうか？ たぶん家の中の仕事、料理、後片付け、掃除など小さい頃から手伝っていたからだと思います。

小学校3年生の夏休みの宿題で「お風呂掃除を毎日する」に決めてから今に至るまでお風呂掃除は彼の仕事になりました。私は1年に2、3回するだけで、もう20年近く彼の仕事になっています。「家庭の中で失業はさせるな」とハローワークの方が言われました。そのとおりだと今思います。

6. 最後に

楽な道のりではなかったのですが、「努力は人を裏切らない」です。また多くの人に支えられ現在があります。感謝、感謝です。

わが子の巣立ちを見守って④

提灯職人になりました

伊藤 佐代子 (岐阜市)

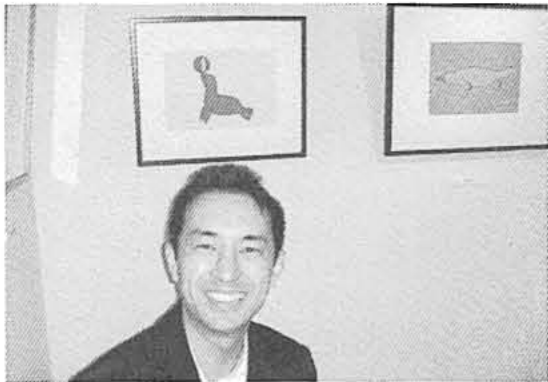
息子は岐阜ちょうちんの絵付け職人をしています。シルクスクリーンの印刷をし、1ミリも違わないきれいな仕事をするようです。自閉症のいい所を最大限に発揮できる職に就いています。

1. 息子の紹介

伊藤 淳司 (あつし)、30歳。自閉症といわれています。小学校は普通学級、中学校は特殊学級、高校は養護学校高等部に通いました。

縫製会社に1年半、転職して今の提灯の会社に10年半勤務しています。

絵画作品の個展を隔年に開催しています。



2. 救われた夜

「言語障害を伴う情緒障害」と児童相談所で言われたのが、3歳児健診後の再検査の時でした。多動で視線が全然合いませんでした。しかし、息子が自閉症だと分かりつつもなかなか認めることができませんでした。各務原市の担当の方に電話で「あなたのお子さんのような障がい児は…」と言われ、「あー私の子は障がい児なんだ」と涙がこぼれてきたのを今でも思い出します。

息子を追いかける毎日でした。何を言っても通じない、一方通行。叱っては自己嫌悪に陥る日々、本の中の「お母さん」と私の「お母さん」の区別ができない子どもでした。しかし、「私が一番の

先生になろう！」と思えるようになってからは、1時間1分1秒が大切でした。

当然なのですが、何をしても「ありがとう」「ごめんね」というような気持ちのキャッチボールができなく、辛い思いをしていました。

私が住んでいた所では夜、チャルメラの音を流しながらラーメン屋さんが通っていました。普段はチャルメラの音を怖がるのですが、ある晩ラーメンを食べたいという仕草をしました。玄関で彼がどんぶりを一つ手に持ち、遠くから聞こえるチャルメラの音が近づいてくるのを一緒に待ちました。玄関のアプローチに二人並んで座って待っていました。この時だけは多動の子が動きもせずジーと待っていました。同じ目的で、同じ時間を共有するというこんな些細なことが、今までの苦しかった思いを簡単に流し去ってくれるほど、快いものであるということを知りました。初めて心が通い合ったと感じました。

一生忘れない光景であり、一生忘れない感情だろうと思います。本当に救われました。6歳くらいだったと思います。

3. 淳司はすごい～！

小さい頃、心が通わないながらもマンツーマンで刺激を与えなくてはと思い、体を使い毎日毎日興味を持つものに挑戦しました。かくれんぼ、粘土細工、工作、パン作り、ケーキ作りや料理などできることはなんでもやりました。その中でも食べるものを作ることは、工作などより興味がわくらしく、とても喜んでやりました。私も一緒に楽しみました。

そこで親の私が「ひょっとして淳司って、天才?」、「素晴らしい発想、すごい!」と彼を心底認めたことがありました。なんとパンで日本列島を作ったのです。びっくりしました。三角形や四

障害のある子どもたちの「ひとりで、自由に、楽しく…」を応援します
障害児放課後・余暇支援事業 ～鎌倉市～

鎌倉市障害者福祉課療育相談担当

●障害児放課後・余暇支援事業とは

子どもたちは、就学を迎える頃から、登下校をきっかけとしてひとりで行動する機会が増えます。また、放課後に友達同士で出かけたり、自分の好きなことを自由に楽しんだりする中から多くのことを学び、成長していきます。

障害児の余暇活動について、鎌倉市内の障害児関係団体がアンケート調査を行ったところ、障害のある子どもたちの中にはひとりで自由に外出することが困難な子どもが多く、外出の機会が少なかったり、家族との外出のため行き先が限られたりすることがわかりました。また家族からは、子どもに付き添わなければならないことが多く、ほっと一息つける時間がほしい、緊急時に安心して子どもを預かってもらえる場がなく心配、障害のある子どもを持つ親同士で気軽に情報交換したいという声があがりました。

市はこの調査結果を受け、家族の付添いがなくても、障害のある子どもたちが安全に楽しく過ごせる場の確保が必要と考えました。そして、平成17年に「のんびりスペース※大船」を、平成19年に「障害児活動支援センター」を開所しました。

●事業の内容

小学生以上の障害のある人を対象として、次のような事業を実施しています。また、近年増加している発達障害等の療育手帳を取得することが難しい子どもたちも利用できるように、市単独の事業としています。

安心して楽しく過ごせる場所の提供

各施設にはボールプールやトランポリンなどの遊具があり、自由に遊ぶことができます。また、夏休みや冬休みには、博物館や公園などマイクロ

バスを使った遠方へのお出かけプログラムを組み、様々な体験が積めるように工夫しています。

家族のレスパイト

子どもが施設を利用している間、家族がほっと一息つける時間を提供します。また、希望があれば学校や自宅までの送迎も行います。

地域の皆さんとの交流

年末の餅つき会など、家族はもちろんそれ以外の人も参加できるような行事を開催し、地域の皆さんと交流を図っています。

●利用について

両施設ともに、事前に利用者登録をしてからの利用となります。なお、利用料金は施設によって違いがありますが、概ね500円/時間です。

利用登録者、利用者ともに年々増加しています。3月末現在の利用状況は次のとおりです。

- ・利用者登録数：87人（両施設の重複登録あり）
- ・利用延べ人数：1,449人（19年度両施設合算）

●今後について

子どもたちや家族の声に耳を傾けながら事業内容やプログラムを工夫し、もっと多くの子どもたちが学校や家庭とは違った様々な体験が積めるよう、両施設のスタッフとともに支援していきます。また、両施設が家族の皆さんにとって、子育て中の悩みごとや困っていることなどを気軽に話せる場となるようにしていきたいと思っています。

事業開始から4年目。この事業が障害のある子どもたちの成長を見守り、家族の思いに寄り添うものとなるようさらに発展させていきたいと考えています。

こんにちは！ ブロックンです

～山おとこのつぶやき～

高橋 隆昭

ブロックンとの出会い

ブロックンの山歩きをお手伝いするようになって5年、二代目「山ボラ」グループである。メンバーの構成は、本格的な山男？山歩き経験者のベテランから、若いころの山歩き経験程度の人や70歳を過ぎてもフルマラソン完走の実力者などなど。メンバーの中心は「相模台男性ボランティア」に所属する人たち、総勢10名程度で、ブロックンには毎回2～3名が参加している。

活動参加のきっかけは、「自閉症児に理解のある山男募集！」の呼びかけで、相模原ボランティアセンターの知人から肩をたたかれたのが始まりだった。

いろいろな所で活動に関わってきたが、正直なところコミュニケーションをとりにくい、彼らを山に連れて行くことには、未知なことがたくさんあった。早速2～3名の山仲間と相談を掛け、バックアップを取り付けた。かつての自閉症児とのキャンプや合宿の経験から、突然走り出す多動児や水が大好きで怖いもの知らずの子どもたちに、いつでも対応できる体力をつくるため、プールでの長距離泳法、マラソンで鍛えた自意識が支えになった。

山歩きを楽しむ子どもたち

最初のハイキングは、「車椅子登山」を実施したことがある里山、鳶尾山の野イチゴが楽しめる6月の山歩き、トイレが適所にある安心コースを設定した。子どもたちの中心が中学高学年、特徴的な奇声や元気な駆け出しが若干見受けられたが、彼らは自然からのメッセージを気持ちよく受



鳶尾山で

け止め澁刺としていた。行動や意味ありげな呪文などを楽しげに表出していた。どうも山歩きがとても好きで、さんさんと浴びる自然の恵みを満喫しているらしい。

経験を重ねるうち、一般ルート、歩行距離も本格的なコースを縦走できる山歩きの心構えが備わってきた。自然界のトイレ、山歩き隊列マナー、そして何よりも集団行動の適応力、毎回変わるボランティアのペアにもすぐに順応し逸脱しない。団体行動のマナーがごく自然に体現されている。

天候激変にも落ち着いて

ある年、7月の山行で、抜けるような晴天が突如の天候激変！ものすごい雷雨に見舞われた。パニックになることが脳裏をよぎったが…。しかし、子どもたちは整然としっかりと指示や励ましに表情も変えず、慎重・真剣に行動した。むしろ、若者の男性ボラのほうが青ざめて余裕をなくしていた。彼らは危機管理能力の優れたものなのだ。リーダーの懸命な行動を素直に評価し、自分の行動に変えていたのだ。

一緒に歩く幸せ

難しい交通機関の乗り継ぎ、集団行動のマナー

不安を共にし、少しでも先の光を感じてもらって、一緒に子どものことを見つめていける関係を築く努力を続けていきたいと思っています。

幸いなことに多摩区ではいち早くお母さんの話し合いグループ「ひなげし」ができています。幼児相談や遊びの会、ひなげしなど親御さんが必要な場面をどんどん利用してくださることを願っております。

4] 事業内容と連携機関

北部療育センターが地域で親子遊びの会「カンガルー教室」を開いてくれるようになり、保健所の遊びの会はなくなりました。ところが、カンガルー教室入室までに何ヶ月も待機しなければならなくなったのです。そこでまた保健師さんたちは1歳6ヵ月健診後の遊びの会「プーさんキッズ」と3歳児健診後の「たま遊びの会」を作りました。ここも大盛況です。遊びの会には保健師、保育士、心理以外に多摩独自のものとしてST（言語聴覚士）も参加し、より充実した内容になっています。

幼児相談では積み木や絵本、パズルなどで一緒に遊びながら、親御さんと子どもの特徴を共有しやすく工夫しています。「こんなところがあったのか」「この行動はこんな意味だったのか」など納得して次に進んでいける良い機会にしたいと思っています。

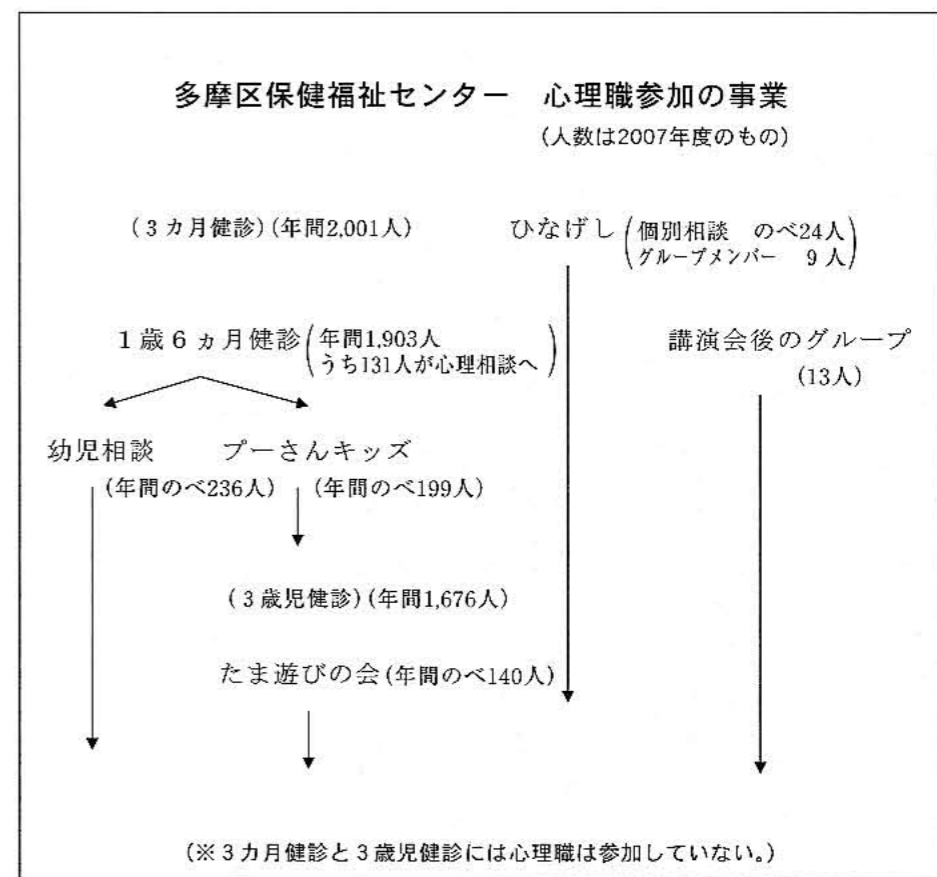
焦点の合った適切な対応で子どもが変わっていくことを目の当たりにすると、親御さんはより時間も密度も濃い療育センターの利用を希望されます。北部療育センターも今までなかったグループを次々作り、皆さんの要望に応えようと頑張っています。これからは発

達相談センターも大きな柱になるに違いありません。これからますます豊かな母子保健の世界が開けていくことでしょう。それぞれの機関でそれぞれの役割を十分に果たすためには連携をいかにするか、が大きなポイントです。皆で知恵を出し合い、話し合う土壌作りを忘れてはなりません。

5] これから

子どもの見方、考え方も20年前とは隔世の感があります。これまでのやり方に囚われず新しいことを常に学び続ける必要があります。私自身がどこまでやれるかを見極めもそろそろ忘れないようにと戒めております。母子保健の世界の心理職も有能な方たちがたくさん出てきています。他職種の方たちとの繋がりも広がっています。

多摩区の職員の方たちは、仕事の本質を見極める力と、必要と認めたことや人をどんどん取り入れて行く柔軟性と積極性を持っています。多摩区のみならず川崎全体を視野に入れ、どのような家族も安心して暮らせるよう共に考えていきたいと思っています。



みんなの未来は、みんなでひらく いのちの森づくり～進和学園から世界へ

進和学園どんぐり委員会

はじめに

進和学園は、1958（昭和33）年6月、出縄明理事長の志のもとに個人の自宅を開放して県内で初めて設置された知的障がい児入所施設(定員40名)としてスタートを切りました。福祉制度がまだ充分でなく、衣食に困る時代もありましたが、地域の温かいご厚情に支えられ、本年2008（平成20）年で50年の節目を迎えます。

ご本人を中心とした7つの輪（ご本人、家族、地域社会、ボランティア、職員、法人役員、行政）のチームワークで進んで参りました。そのなかで利用者ご本人の成長とニーズに合わせて必要な施設・事業を展開し、現在、就労継続支援A型・B型・就労移行支援各1カ所、授産施設2カ所、更生施設3カ所、グループホーム(共同生活住居14カ所)、居宅介護、移動支援、相談支援、ともしびショップ、保育園2カ所等の事業を運営し、利用者ご本人は400余名になりました。

また地域への感謝として実施してきた湘南平公園の美化清掃業務（平塚市よりの委託事業）、平塚市民の花「なでしこ」の苗の育成（毎年、緑化まつりや地域公民館にて3千鉢を市民に無料配布）、あじさい（200種4千株になりました）の湘南平植栽等の事業は、「いのちの森づくり」につながる豊かな自然の心を育む取り組みです。



平塚市緑化まつりにてなでしこ苗配布

宮脇昭先生との出会い

宮脇昭先生（横浜国立大学名誉教授）との出会いは、出縄明理事長がNHKラジオで、先生の話に感動したことがきっかけでした。不思議で運命的なご縁が重なり、2006年3月開設の知的障がい者福祉工場・通所授産施設「しんわルネッサンス」建設の植栽計画についてご指導いただけることになり、建設途中の現場に2005年10月に来ていただきました。建設現場担当者、設計監理担当者、進和学園関係者の前で「本物の仕事をするなら協力しましょう！」と力強くおっしゃり、全員と固い握手を交わしました。植樹祭に先立ち、竣工式の記念講演会で「いのちの森づくり～進和学園から世界へ」と題して、使命感と情熱をかたむけて語っていただきました。「いのちの森が育てば、いのちの福祉が育つ。本物だけが厳しい環境に耐えて生き残れる」、先生の語られることすべてが福祉の原点そのものでした。私たちは感動のうちに試行錯誤で「いのちの森づくり」プロジェクトをスタートさせました。



宮脇先生による植樹指導

「本物の森」をつくる宮脇方式

進和学園の「いのちの森づくり」は、宮脇先生の提唱する潜在自然植生、すなわちその土地本来の樹木である「ふるさとの木」を見極めて苗木を育て、主役となる樹種を中心に混植、密植して本来あるべき自然の森(本物の森)を創生するものです。高木を主体に中、低木も自然のシステムの中

で競合しつつ共生してバランスのとれた本物の森を形成するのが本来の姿です。神社仏閣に残された「鎮守の森」が本来の姿を物語っています。「本物の森」は厳しい環境に耐え、長持ちします。管理コストも最小限にすることができます。主役のシイ、タブ、カシ類は深根性、直根性のため地中深くまっすぐに根を張って、台風、地震、大火、洪水などから人間の命を守ってくれます。

2006年4月、「しんわルネッサンス植樹祭」を開催。進和学園の利用者ご本人、ご家族、職員、地域の皆様・子供たち、社会一般の参加希望の皆様、「まじえる会」（植樹ボランティアグループ）様など570名が参加、宮脇先生のご指導のもと、施設用地の周囲1,442㎡にシラカシ、アラカシ、タブノキ、スダジイ、ヤマザクラ、イロハモミジなど高・中・低木の苗52種類で計4,888本を植樹しました。参加者の晴れ晴れしい笑顔が印象的で、新施設の明るい未来を期待させるものでした。



どんぐり委員会（宮脇先生と共に）



どんぐりハウス作業（施肥）

いのちの森づくりを進める 「どんぐり委員会」

2006年10月、地元湘南平のどんぐり拾いからスタート。当初、あさひホームの園芸作業用小型ビニールハウスでポット苗をつくり始めました。どんぐり拾いのために平塚市内の調査を行い、どんぐりマップもつくりました。より広いビニールハウスが必要になり、地域ご支援者の協力により、平塚市飯島にある大型ビニールハウスを2007年6月より、農業委員会を通じて県知事許可を取得し借用できることになりました。水も井戸水が使用できます。ハウスオーナーも手伝ってくれることになりました。進和学園各施設の担当者でどんぐり委員会をつくり、交替でハウスへ出かけ、ポッ

ト育苗に本格的な取り組みを始めました。

こうして育てたポット苗を、今年3月、初めて出荷、神奈川県建築士会中支部さまに200ポットをお買い上げいただきました。4月には、秦野市の落合八幡神社の千年の杜づくり植樹祭において、私たちが育てたタブノキ120本を初めて使っていただきました。当日、進和学園からも20名が参加し、感激の植樹祭となりました。



落合八幡神社植樹祭

今後の取り組み

現在、「どんぐりハウス」956㎡に高木のシイ、タブ、カシ類を中心に中木のネズミモチ、イロハモミジ、ヒメユズリハ等、低木のアオキ、シャリンバイ等の計4万本を育成中です。本年は隣接のハウスも借用できるよう手続きを進めており、今年度は約8万本の苗を栽培する計画です。

今、私達が地域へ、社会へ恩返しできることは、「明日のために、未来のために木を植えること」に微力ながらも真摯に取り組むことと信じています。進和学園授産事業を推進する関連会社(株)研進と共に進めていきます。

私達が育てた「どんぐり」ポット苗を行政、企業、学校、地域等の植栽計画においてお使いいただければ幸いです。売上げはご本人の生産活動として、その収入がご本人の工賃となります。自立へ向けての社会参加が図られることはこの上ない喜びです。立派な巨木もひと粒のどんぐりからです。進和学園のささやかな取り組みが、いずれ芽を出し大きく成長していくことを信じて、「いのちの森づくり」の輪を少しでも広げていきたいと思えます。

詳細は進和学園のホームページをご覧ください。

<http://www.shinwa-gakuen.or.jp>